

「言葉の権威」(ルカによる福音書四章三一〜三七節)

## 1 癒やし

今日は、ペトロの説教の一つを思い起こすことから、説き明かしをはじめたいと思います。

使徒言行録一〇章にある、ローマの百人隊長コルネリウスの家でペトロのした説教です。その中にこういう一節があります。

ヨハネが洗礼を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事です。つまり、ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人々をすべていやされたのですが、それは神がご一緒だったからです(一〇・三七〜三八)。

この中でとくに「イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人々をすべていやされた」というくだり、これがペトロの、ガリラヤのイエスの活動を振り返っての証言です。

いうまでもなくペトロは、イエスの最初の弟子の一人、最後まで付き従い、イエスから後の教会を託された人です。そのペトロの心に刻みつけられていたガリラヤのイエスの姿は、まさにそのようなものでした。

先週私どもはイエスの働きを三つの動詞で表してみました。「教える」、「宣べ伝える」、「そして「癒やす」です。「教える」と「宣べ伝える」を一つにして、言葉による働きと言ってもよいと思います。この言葉による働きと、行いによる働き、助ける働き、これがイエスのしていたことです。

そうしたイエスの活動を、ペトロがここで、すぐれた教え、言葉、聖書の説き明かしなど、たくさんある中で、「人々を助け、悪魔に苦しめられている人々をすべていやされた」という言葉でまとめているところに、私どもも少し考えてみるべきことがあるように思います。

もちろんイエスの言葉による福音宣教と、その癒やしのわざによる福音宣教、どちらが重要で、どちらが上というようなものではないのは、いうまでもありません。しかしペトロが、その説教で、ガリラヤのイエスの働きを、先ほど紹介したように、「人々を助け、悪魔に苦しめられている人々をすべていやされた」とまとめているのは正しいのです。

このイエスの働きを、先週は、神の国という言葉と結びつけて少し申し上げたところです。イエスがしたのは神の国の福音の宣べ伝えでした。神の国とは、神の支配です。そしてイエスは、たんに神の国を言葉で指し示し、明らかにしたわけではありませんでした。神の国を、ご自身とは別のところにあるものとして語ったわけではありませんでした。そうではなくて、わたしにおいて神の国は来ていると語ったのです。そ

これが聖書に登場する、あまたのすぐれた人物、預言者にしても、王にしても、彼らと違うところです。もちろんそれらの人たちもみな、神の国、神の支配の来ることを、いつも問題にし、預言し、指し示したのです。しかしイエスは、自らを、神の国そのものとして示したのです。

洗礼者（バプテスマの）ヨハネが、獄中から、弟子をつかわし、イエスにこう尋ねたことがあります。「来たるべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」（七・一九）。イエスの答えはこうでした。

行つて、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、らい病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである（七・二二～二三）。

神の国はイエスにおいて来ています。神の支配はイエスにおいてなっています。神が本来にこの時を、この場所を支配しているなら、どうして悪の力がなおそこに力をふるうことがあるでしょうか。どうしてそこに死の力がなお支配しているということがあるでしょうか。洗礼者ヨハネは、イエスのこの答えによって、悟ったはずです。確信したはずです。神の国がこの方と共に到来している、この方がメシア、キリストだと。

同じくペトロも、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをいやしたイエスに神の国の到来を見たのです。神がイエスと一緒にいることを悟ったのです。イエスこそ、キリスト（メシア）、そのように彼は、コルネリウスの家で人々に証ししたのです。

## 2 カファルナウムでの出来事

今日の聖書箇所に戻ります。イエスはカファルナウムにやって来ます。

イエスはガリラヤの町カファルナウムに下って、安息日には人々を教えておられた。人々はその教えに非常に驚いた。その言葉には權威があったからである（三一～三二節）。

山沿いの町ナザレからガリラヤ湖北西岸カファルナウムに来たので、「下って」となっています。

地中海からダマスコに抜ける街道筋にも当たるカファルナウムは、比較的大きな港町でした。そこには徴税所、会堂（シナゴグ）があり、ローマ軍が駐在し百人隊長もいたようです（五・二七、七・二）。発掘調査では、住民の数は一五〇〇人ぐらいと推定されています。そこにペトロの家もあり、そこはイエスの活動の拠点ともなっていました。

前回のナザレ同様、ここカファルナウムでもイエスは、安息日に会堂に行き、礼拝

を共にし、かつ教えています。

また同じくここでも会堂にいた人々はその教えに非常に驚いたとあります。ナザレではイエスの恵み深い言葉に驚いたとありますが(二二節)、ここカファルナウムでは、その言葉に権威があったから驚いたとあります。イエスの言葉の権威を感じさせた出来事が会堂で起こったのです。

会堂に、汚れた悪霊に取りつかれた男がいて、大声で叫んだ。「ああ、ナザレのイエス。かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」。イエスが「黙れ。この人から出て行け」とお叱りになると、悪霊はその男を人々の中に投げ倒し、何の傷も負わずに出て行った。人々は皆驚いて互いに言った。「この言葉はいつたい何だろう。権威と力をもつて汚れた霊に命じると、出て行くとは」(三三〜三五節)。

エクソシストという言葉があります。悪魔払いをする人のことです。じつはカトリック教会では二十世紀に至るまでそういう役割をになう人が、教会に置かれていたようです。いまは廃止されています。

今日の私どもの箇所はそうしたいわゆる悪魔払いにも似たシーンです。悪霊を「叱る」だとか悪霊が「出て行く」だとかという言葉は、いわゆる悪魔払いなどでも用いられる言葉のようです。しかし呪(まじな)いととなえたり、呪いをかけたり、こういったことのないこの場面を私どもは、いわゆる悪魔払いと一緒にたににして考えるべきではありません。

むしろ当時の人々の、聖書もその中であつた、一般的な人間観を考えてみる必要があります。目に見えない闇の力、悪しき霊の力が、ときに人間をとらえ、支配し、自由を奪い、その体と魂を破壊する。したがって病気も、またもつと社会的な貧困や政治的抑圧の背後にも、そうしたものが働いているという考えがあつたのです。まさにここに出てくる「汚れた悪霊に取りつかれた男」は、そうした悪霊によって病気にされていると見られていたのです。

「大声で叫んだ」とありますが、叫んだのはこの男なのか、彼にとりついた悪霊なのか、はっきりしません。「我々」という言葉を悪霊が口にするほど、悪霊は一つとなつてこの男の自由を奪い、男の人間性は破壊されていきました。

注意したいのは、悪霊が叫び出したとき、すでに激しく攻撃されていて、境界線を守らなければならない、さもなければ滅ぼされると、たいへんな危機感の中にあつたことです。礼拝において語られたイエスの言葉の前に悪霊は居場所を失いかけているのです。イエスの言葉は力をもつてすでにそこを支配しています。

### 3 み言葉の権威

イエスの言葉、それは「捕らわれている人に解放」(一八節)を告げる言葉、「圧迫されている人を自由に」する言葉でした。その言葉をもつて人が癒やされます。救われます。それゆえ改めて私どもは言葉というものを考えておく必要があるのではな

いかと思います。

いま考えているのは抽象的な一般の言葉のことではありません。そうではなくイエスの「黙れ。この人から出て行け」という言葉です。そしてその言葉が、じつさいなるということです。

言葉は、ふつう私どもの意思疎通の道具です。もちろん言葉がなくても意思疎通はできます。しかし言葉による交流は、たんに用件を伝えるだけでなく、人と人とを結びつけるものです。あるいは逆にいえば、離反させるものです。言葉の前提にころがあるからです。言葉によって交わりはつくり出されます。聖書が、神は人間をつくり、「男と女につくられた」（一・二七）と記したとき、そうした言葉による人との交わりを想定していたと思います。

しかしもつと根源的に考えれば、言葉は、聖書の言葉には、神の言葉にはそのまま実現される、出来事となる力が秘められているのです。聖書の始まり、創世記の冒頭にこうあります。

神は言われた。「光あれ」。こうして光があつた。神は光を見て、良しとされた（一・三〜四節）。

神の言葉によって、光がそこに存在します。しかもそれは決して神のご支配を外れたものではありませんでした。神の言葉は、創造する力を秘め、そのまま出来事となります。

主が仰せになると、そのようになり、主が命じられると、そのように立つ（詩編 三三・九）。

わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくはわたしのもどに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす（イザヤ五五・一一）。

これが神の言葉です。イエスの言葉は、そのまま出来事となって、悪霊に取りつかれた男は解放されたのです。

この男にもう一度注意してみたいと思います。先ほど少し申し上げたように、悪霊は男にとりつき、乗り移り、一体化しています。まるでこの男が悪霊そのものであるかのようにです。周りの人も、男をそのように見ていたのではないのでしょうか。彼も取りついた悪霊と同じだと。

しかしイエスが「黙れ。この人から出て行け」と悪霊に命じたときイエスは、その男と、その男をとりこにしている悪霊を、はっきり切り離して見たのです。罪を憎んで人を憎まず、それと同じく、イエスは、この男を解き放たなければならぬ人と見たのです。彼は会堂で叫んでいるような男でした。しかしイエスはそれは彼のせいではないと見ていたのです。彼は彼として解き放たれ、社会に復帰し、与えられた自分の生を生きるべきです。

悪霊はその男を投げ倒したけれど、何の傷も負わず出て行ったとあります。イエ

スはそうすることを悪霊に許しませんでした。イエスとともにそこに神の国が来ていたのです。私どものこの世の現実を上回るもう一つの現実、神の現実、その現実を私どもも信仰によって生きたいものです。

(二〇二一・一・二四)